

◆ いざかまくらトラスト主催 鎌倉文化を学ぶ会 第2回 ◆

講演 「国宝・鎌倉大仏造立の謎～建長4年、大仏鑄始～」

平成 23 年 7 月 2 日 (土) 午後、いざかまくらトラスト主催、推進協議会共催の講演会「国宝・鎌倉大仏造立の謎」が高徳院で開かれました。講師は同トラスト副代表で、推進協議会広報部会長の内海恒雄さんです。震災の影響により日程が延期になっていたが、100 人を超える参加者があり、盛況でした。

鎌倉大仏は、日本を代表する巨像として、国内外の人々に広く親しまれていますが、造立については謎が多く、いつ、誰が、どういう目的で造ったのか十分解明されてはいません。今回の講演会では、限られた文献史料をもとに、世界遺産候補地として発掘調査が行われた成果を加えて、造立の様子を伺うことができました。

また講演会の後、境内の公開されていない庭園・茶室や、韓国王宮から移された観月堂などを特別拝観しました。以下は講演の要旨です。



鎌倉大仏

関与を示している。

銅造大仏の完成時期については明確な史料がないが、『授手印決答受決鈔』(1260 年頃成立か)では浄光が「大仏造立が未完成」と言い、文永 5 年(1268)には日蓮の『大仏殿別当への御状』が出されているため、この間に完成したと見られる。

●鎌倉大仏造立が意味するもの

鎌倉大仏が造られた長谷は、当時「深沢里」と呼ばれた鎌倉の外れだが、京都からの玄関口で、朝廷に対抗する象徴的な場所だった。ここに日本有数の長谷観音と大仏を造ることは、鎌倉が仏都で仏教の理想郷であることを示している。そして阿弥陀如来として現存していることは、『大仏旨趣』にいう八幡大菩薩の本地仏として武家政権の守護仏であり、民衆に広まってきた極楽浄土の信仰を集めるものだった。

源頼朝が再建に協力した東大寺大仏は、聖武天皇によって国家の力を具現化し、宗教的な鎮護国家の思想によって造られた。これは、政治権力の「王法」が大仏に象徴される「仏法」に「相依り相助ける」という考えに基づくもので、頼朝に始まる武家政権にも受け継がれていた。北条泰時は、公家政権を凌駕する武家政権として北条氏による執権政治を確立させた。木造大仏はこの泰時によって造営が始められたが、銅造大仏の鑄造は執権政治を完成させた北条時頼によって始められている。そして、幕府を支える北条氏一門がそれぞれ協力している。これは鎌倉幕府が朝廷に対して、「王法」の地である鎌倉にふさわしい大仏造営により「仏法」の地として、政治的にも文化的にも独立した形を示したと考えてよい。大仏は「武家政権完成の記念碑」となったことを意味するものと思われる。



観月堂前で解説する内海恒雄さん

●鎌倉幕府が深く関与した大仏造営

源頼朝は、東大寺大仏の再建に多大な貢献をしているが、それは武家政権を認めさせるためであり、

頼朝には武家政権を守護する大仏を造りたいという願望があったと思われる。しかしそれを果たすことはできなかった。

『吾妻鏡』によれば、嘉禎 4 年(1238)、僧浄光が勧進をして大仏堂の造営を始め、大仏の頭を挙げており、さらに翌年にも、残る北陸や西国での勧進の下知を幕府に依頼している。このように大仏の造営は、僧浄光が企て、諸国を勧進し、造立したように見えるが、実際には幕府(北条氏)が様々な形で支援している。例えば、囚人を逃亡させてしまった御家人への過怠料や、鎌倉中の僧徒の従者の刀剣を取り上げることで、大仏や大仏殿の造営に寄進させている。また、寛元元年(1243)に大仏殿が完成した際にも、幕府の護持僧・良信が大仏供養の導師を勤めている。なお、この時は木造の大仏であった。

金銅 8 丈の釈迦如来像の鑄造が始まるのは建長 4 年(1252)である。これが現在の大仏と見られる。建長 7 年に、幕府(執権北条時頼)からの人身売買の科料が地頭から大仏に寄進されていることも、幕府の